
とある科学の究極武装（アテルマウェポン）

ぱっつあん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アテルマウエゴン
とある科学の究極武装

【Nコード】

N5857N

【作者名】

ぱつつあん

【あらすじ】

神の手違いによって殺された少年『龍崎真夜^{りゅうさきまゆ}』。いくつかの能力をその手に新たなる人生を歩き出す。俺が目指すは原作ブレイクだ！とある科学の超電磁砲の二次創作です。主人公は最強ではないです（多分）

転生！えっ？その前にテスト！？（前書き）

ではどうぞー！

転生！えっ？その前にテスト！？

早速だが言わせてもらつことがある。

いや、言わなければならないことがある。

「どこなんだここは――――っ！？」

と、俺が叫ぶと謎の空間で俺の声がまるでまやびこの如く響いていた。

そう、俺は先ほどまで自分のベットの^{レールガン}の上でせんべいを片手に、とある科学の超電磁砲'のDVDを見ていたんだ。

しかし睡魔と言う敵が俺を襲撃しいつの間にか寝ていたらしいんだな。

そんでもって次に俺が目を覚ましたらこのなあんにもない真っ白な空間にいたってわけなんだ。

「はぁ……。まったくたちの悪い夢だ……」

どうせなら御坂さんとか出てきてほしかったぜ。

実は俺はとある科学の超電磁砲の大ファンなんだ。

いや、違うな。俺がとある科学の超電磁砲をみるきっかけになったのは御坂さんが俺のハートを射抜いたからだ。

つまり、俺は御坂さんだけのファンと言うことなのだ！

まあ、しかし？とある魔術の禁書目録インデックスの原作を読んで俺は崩れ落ちた。

だって御坂さん、上条さんのことが好きなんだよ！？

「あー！！あの旗男がーっ！！」

と、俺は普段発散できない上条さんのバカヤロオエネルギーを放出する。

ふう、これで少しは落ち着いたぜ。

っ！が早く夢覚めろよ。

いつまで俺をここにいさせる気なんですか？

しかも誰もいない空間に一人きりって…。

放置プレイは好きじゃないんだけどな。

てか俺は攻められるより攻める派だつつつの。

ん？俺俺言ってるけどお前は一体誰なんだだって？

そうかまだ自己紹介してなかったか。

俺は、龍崎真夜、だ。

間違ってもマヤとは呼ぶんじゃねえぞ？

俺の名前はシンヤだ。こんな名前のせいで女に間違われるわ女顔のせいで女に間違われるわ…。

ホント散々だった…。

「ホント散々だったのね」

「うんうん。そうなんだよ。分かってくれる人がいるか」

……………

ん？俺は一体誰と話したんだ今？

確かここには何故だかは分からないが俺しかいなかったはず。

そう思った俺は後ろを振り返った。

するとそこには…

「イルククウ！？」

何故かゼロの使い魔のタバサの使い魔の人間時の姿のイルククウが俺の目の前にいた。

俺がゼロの使い魔を見るようになったのはこのイルククウがいたからと言っても過言ではない。

まあ、アニメ版では少ししか出てなかったのが残念だ。

「私はイルククウじゃないのね！！神様なのね！！」

HAHAHA そんな可愛らしい声で言われても信じられないさ

ん？待てよ？ここは俺の夢の世界なんだからイルククウが神様でも可笑しくないか。

「だからイルククウじゃないのね！！」

む？心が読まれただど！？

そんなところがまたかわいいんだなコンチクショー！

「か、可愛いだなんて照れるのね……／／／／／」

「ぐはぁ！？」

や、やばい……。

その照れる仕草がなんとも壺にはまってしまう。

よし、どうせ夢なら思い切って言ってやるぜ。

「あのイルククウ？」

「だーかーらー！！イルククウじゃなくて神様なのね！！」

はい、この際神様だろうとイルククウだろうとどっちでもいいです。

だってどっちにしろ可愛いし。

「か、可愛いだなんて何回言われても照れるのね…／＼／＼／」

ぐはぁ！？やばい、このままでは俺のヒットポイントが0になってしまふ。

早めに言わなくては。

「あのイルククウ」

「だーからー」『はい、分かりました神様ですね』分かればいいのね」

このままだといつまで経つても話が進みそうにないのでとりあえずイルククウを神様と認める俺。

とにもかかわらず言うしかない。

「あなたのことが好きです。つきあってください」

言っちゃまったぜ…。

「はうゝ…、いきなり言われても困るのね…／＼／＼／」

顔を赤くして恥ずかしがるイルククウもとい神様…ぐはぁ！？

まずいヒットポイントが…。

夢のくせにリアルすぎるぜ…。

「さつきから思ってたけど夢って何のことなのね？」

今更ですか？神様…。

「いや、この出会い自体が夢でしょ。だって実際神様に会ってたら俺死んでることになるし」

「うん、君は死んでるのね」

……………えっ？

なんて言っただこの神様？

俺が死んだ？いやあるわけねえよ。

だって俺さつきまでピンピンしてたんだよ？

それなのに死ぬ訳ないだろ…と思いたい…。

「ごめんなのね。実は私がミスして寿命がつきる人を間違えたのね。本当だったら他の人だったのね」

……………つーことはホントに俺死んだの？

えっ？なにこれよくある展開？

まさか俺がこんなに出くわすなんて…

「本当だったらマヤって言う女の子だったんだけど君と同じ漢字だ

し顔も女の子みたいだっから間違えたのね。キュイ」

やっぱりこの女顔と名前のせいか……………っ!!

くそう、今まで散々だったがここまでくるとは…もうホントに…

「不幸だ……………っ!!」

「ホントごめんなのね…」

「うん、許す」

だってこんなに落ち込んでイルククウじゃなくて神様見てらんねえし。

ん？神様？と言うことはまさか転生できるのか！？

いやいやまさかそこまでうまく行くわけ…

「どうして転生させるって分かったのね？」

……………

来たぜ俺の時代がな!!

「いや、何となくです。で、どこに転生させてくれるんだ？」

「本当だったら死んだ人を転生させるのはダメだけど君は私がミスして死んじゃったから特別に好きな世界でいいのね」

マジっすか!？

「だったらとあ『ちよつと待つね』」

ん？いきなりどうしたんだ？

「転生させる前に転生する資格があるかテストするのね」

あなた様に殺されたのにテストですか…

まあ、いいけどな。

「このテストにはちゃんとした意味があるのね。まだ生きたいという意志が強くないと合格できなくなるから気をつけてほしいのね」

「ああ、分かった。で、テストって何をするんだ？」

「私のペットと戦ってもらうのね？」

神様はそう言つと指をパチンと鳴らした。

つーかペットと戦えってどういうことだ？

と俺が思っていると…

ドガアアアアアン

と言う何か落ちてきた音が俺の後ろから聞こえてきた。

つつかこの効果音からしてかなりののでかさだよな？

そう思った俺はギギギと首をひねり後ろを確認した。

するとそこには…

「紹介するのね。私のペットのケル・ベロスなのね」

巨大な三首の化け物がいた。

「ま、ままままさかとは思うけどこれと戦うの？」

俺が怖じ気付きながら言うと神様は親指を立てて頷いた。

えっ？こんなのと戦うの？

自慢じゃないが俺、喧嘩強くないしっ！かこんなのに勝てる訳ないよね？

「もしベロスちゃんに負けたら地獄行きだから気をつけてほしいのね」

「ふ、ふざけんなー！ー！ーっ！ー！」

と言う声はむなしくこだまして俺の転生か地獄行きかがかった戦いが始まった…。

俺、地獄行き決定だな…

...>U

転生！えっ？その前にテスト！？（後書き）

感想待ってます！

能力発現！その名も…

「ギャアーーーーっ！？こんなのに素手で勝てるわけねえだろーーーー
ーっ！？」

皆さんこんにちは、龍崎真夜です。

只今俺は絶賛逃亡中です。

一体何からかと言うと神様（イルククウ似）のペットのベロスちゃん、ぶっちゃけ化け物から逃げてんだ。

「逃げないで戦わないと転生出来ないのね！頑張って戦うのね！」

「んなこと出来るかーーーーっ！？」

こんな化け物相手に素手で戦うなんて命を捨てるようなもんだ。

てか武器あつたって勝てるわけねえだろが！！

「ホントに生きたいと思うなら何かの力が出るはずなのね！」

何かってアバウトすぎんだろうが！！

てか力って神様がくれるんじゃないのか！？

「私にはそんな権限ないのね！だから君の心のエネルギーを自分の力の形にするのね！」

自分の心のエネルギーを力にするって言ったってやり方わかんねえよ!!

ええいままよ!我をお守りください!!

俺は逃げるのを止めて化け物に向き直る。

「さあ来い!!俺の力!!」

俺はそう叫びながら手を上にかざした。

.....

あれ?なんにもおこんねえぞ?

『グワアアアアッ!!』

変なことしてるから化け物に追いつかれました。

てかマジやばいから!?

あんな鋭くて長い爪で引つかかれたら地獄行きどころか死んじゃうわ!!

あつ、俺死んでたんだった。

「一人コントやってないで早く戦うのね!このままだと一生転生出来ないのね!」

「んなこと言われても武器もなしにこんな非日常に立ち向かえるか

「……………っ!？」

ああ、キヨンよおまえの気持ちが今よく分かったよ。

お前もこんな気持ちだったんだなあ…。

とりあえず追いつかれたので再び走り出す俺。

「くそう、もう疲れてきやがった…。テメエ速すぎんだよ!！」

と俺は後ろから俺を追いかけてきている化け物に叫ぶ。

だって仕方ねえじゃん。速すぎんだからよ。

だがそんなことを思った刹那、俺の体は地面にたたきつけられ化け物に押さえ込まれちゃった。

「がはっ!？」

ヤベエ、「冗談抜きでやられる…。

くそっ、こんな不幸な死に方した拳げ匂にこいつにやられたら地獄行きだと？

ふざけんな、そんなことになってたまるか!!

そう思った瞬間、俺の左手の甲が光り出すのが目に入った。

これはまさか…

「マヤ！！今なのね！！」

「俺はマヤじゃねえ！！ガンダールヴの龍崎真夜だーっ！！」

俺はそう叫び化け物の腹を蹴り飛ばしその場を脱出した。

そして左手の甲を確かめるとやっぱりガンダールヴのルーンが刻まれている。

どうやら俺の心のエネルギーはガンダールヴを選んだみてえだな。

「マヤ！！デルフリンガー（剣）を抜いて戦うのね！！」

「だから俺はマヤじゃねえって言ってんだろ！！」

俺は神様にイルククウそう叫びながらガンダールヴのルーンが現れたと同時に俺の手に現れたデルフリンガーを抜き放つ。

そして俺はデルフリを構えながら化け物を見据える。

つか使い方分かなかったのにガンダールヴ効果で使い方が分かるぜ。

「オオオオオオオオッ！！」

俺はガンダールヴ効果で身軽になってるのを利用して化け物の四肢のしたに潜り込む。

「喰らえ化け物が！！」

そして俺は化け物の腹めがけてデルフリを突き上げた…のだが…

ガキンッ

あれ？なんかデルフリが弾かれてるんですけど…

『ガアアッ！！』

「うつ！？」

ガキーン

俺は化け物が爪で俺を引っかくこうとするからデルフリでそれを防いだのだが予想以上にこいつが馬鹿力だったからぶっ飛ばされた。

ヤベエ、手すげえ痺れるんだけど…。

「なあ、神様。あいつ体硬すぎじゃねえ！？」

「うん だってケルベロスだからなのね」

「いや、そうじゃなくて力の使い方知らない俺にそれって強すぎじゃね？」

「うーん……………そうかもしれないのね」

うん、可愛いから許す

「だからかわいいだなんて恥ずかしいのね…／／／／／」

うん、そんなところもまた良いが今はそんなことを言ってる場合じゃないな。

俺は俺を切り裂くのを失敗して悔しがる化け物に向き直りデルフリを構える。

つうかなんか技ないの？

このままじゃせつかく力を手に入れたのに地獄行きになっちまう…。

あつ、そうだ。

「なあ神様！！心のエネルギーって一回だけなのか！！」

もし一回だけじゃないなら技を使えるようにしてあの化け物を倒す。

「うーん……。心のエネルギーは一回しか生まれないんだけどその心のエネルギーがまだ残ってるなら何か使えるようになるはずだね」

よし、そうと分かりやあ…ん？そーいや俺さっきは無我夢中だったから心のエネルギーの使い方分かんねえんだけど！？

や、やばいこのままじゃ本当に地獄行きになっちまう。

『ガアアアアアアッ！！』

「ッ！？」

俺がそんなことを考えていると化け物が俺に飛びかかって来やがっ

た。

それを俺はガンダールヴ効果で身体能力があがってるからギリギリだったがかわすことが出来た。

だけどこのままじゃ決着がつかねえな。

仕方ねえ、使い方が分かんねえならガンダールヴだけでやるだけだ！！

「オオオオオオオオッ！！」

俺は雄叫びをあげながら化け物に接近する。

そして化け物の目の前まで行くと俺は化け物の真上に飛び上がり落ちる勢いを利用して化け物の三つの顔の真ん中を斬りつけた。

『ゴガアアアッ！？』

よし、効いてるみたいだな！！

もしかして顔面が弱点なのか？

だったら顔面を集中攻撃だ。

「ハッ！！」

俺はさっき傷つけた顔とは違う顔を躊躇なく斬りつける。

すると今度は血がまるで噴水のように噴き出してきて俺の視界をつ

ぶしやがった。

やばい！？このままだと狙い撃ちされる！？

そう思った俺は狙い撃ちされないためにがむしやりに動きながら目についた血を拭く。

そしてようやく視界を確保できた俺の脇を化け物が通り過ぎていった。

へっ、ざまあみろってマズい！？

何がマズいと言うと俺の脇を通り抜けた化け物がそのまま神様に向かっていつていたのだ。

しかも俺にやられて頭に血がのぼってるのか主人かどうかも分からなくなってるらしい。

「神様！！危ねえ！！」

そう、俺が叫ぶが神様は何故か避けるそぶりを見せない。

何やってんだよ！！

と、思ったが神様の足が震えていることに俺は気づいた。

どうやら恐怖で足が竦んでいるようだ。

だけどその間にも化け物は神様を食い殺そうとしている。

たとえ神様でも死にはしないかもしれないけど痛みを感じるはず…。

そこまで考えると左手のルーンが光りそれと同時に俺は化け物と神様の間に一瞬で入りデルフリで化け物の一撃を防いでいた。

どうしてこんな速さで動けたかは分からない。

ガンダールヴの効果でもここまでの速さは出なかったしね。

だけどやることは一つだけ…。

「こいつを気づけるのは俺が許さない」

俺はそう言つと化け物を押し返してデルフリを鞘にしまう。

「マヤ、ありがとなのね／＼／＼／」

「だからマヤじゃねえって。まあいいや、今は下がっててくれ。これは俺のテストなんだからな」

俺は赤くなっている神様にそう言いいつの間にか使い方が分かるようになったもう一つの技を使う。

「神鳴流奥義【斬空閃】！！」

俺がデルフリを一気に抜き放つとデルフリの刀身から斬撃が放たれ化け物の足の一本を切り裂く。

どうやら俺の心のエネルギーはもう一つの力を魔法先生ネギま！の神鳴流を選んだようだ。

「お前を倒して俺は転生する!!」

俺は足を切られ苦しんでいる化け物にガンダールヴの身体能力向上を使い一気に近づく。

そして…

「神鳴流決戦奥義【真・雷光剣】!!」

俺は真・雷光剣を使い化け物を跡形もなく消し飛ばした。

だが化け物を倒して気が抜けたのか俺の足から手から全ての力が抜けて俺は膝についてヘタレ込んでしまった。

「はぁ…はぁ…はぁ…。やった、のか…?」

俺は半信半疑になりながら誰に問いかけるわけではなくつぶやいた…。

初めて見た生き物、初めて見た異質、初めての経験…。

そして初めての戦いでの勝利…。

「やった……。勝った……。勝ったんだーっ!!」

俺は大の字になりながらその場に寝転がった。

そう、俺は転生するためのチケットを手に入れたのだ。

「お疲れ様なのねマヤ」

「だから俺は…ってまあ、いいや」

俺は今最高に気分がいい。

こんなすげえ力を手に入れたしそれに何より転生出来るんだ。

「おめでとうなのね。マヤは二人目にこの試験を合格した合格者のね」

「へ？俺が二人目？」

どういうことだ？

「実は今までのことは全部計算通りだったのね。君がピンチになるのも私が襲われるのも」

「なんだ…」

ん？けどどうして前に来た奴らは不合格だったんだ？

俺より強い力を得た奴なら簡単に倒せるはずだ。

一人目の合格者同様に…。

「うん、マヤの力よりも強い力を出した人はいるのね。だけどその人たちは力に溺れて自滅したのね」

「なるほどな。つまり俺は力に喰われなかったってわけだ」

ようやく地獄行きの意味が分かったよ。

これはただ単に地獄に行くわけじゃない。

力に食われて存在そのものが消滅するってことだったんだ。

「まあ、とにかくにも俺は転生出来るんだよな。去れ（アベアツト）」

俺が呪文を唱えるとデルフリがカードに変わる。

まあ、これも俺に身についた能力みたいだな。

「そうなのね。だけど転生先はどこにするのね？」

そんなものは決まってますとも。

「とある科学の超電磁砲レールガンの世界に転生させてくれ」

「分かったのね。だけど転生する前に言っておくことがあるのね」
言っておくことがある？ なあんか嫌な予感がするんですけど。

「本来世界にいない人がいきなり世界に出てきたら世界のバランスが崩れるのね」

ふむふむ、すげえ嫌な予感だ。

「だからバランスが崩れて発生した問題を解決してほしいのね」

あー、そう言うことね、うん。

「だめかな？」

いえいえ、あなた様の頼みごとならたとえ火の中、水の中だろうと成し遂げてみせます。

「大丈夫です」

「ありがとなのね！！」

「わっ！？神様っ／＼／＼／」

いきなり抱きつかないでください！？

柔らかいものが俺の肘にぶつかってるんですけど！？

「ご、ごめんなのね／＼／＼」

そのように照れるあなた様はともかわいらしいです。

「じ、じゃあ早速転生させるのね」

「お願いします」

すると俺の体は透けていきだんだん見えなくなっていく。

最後に神様、俺はあなたを恨んでないからな。

「ありがとなのね、マヤ」

だからマヤじゃないって。

まっ、いいや。

そして俺は白い空間から完全に姿を消した。

つづく…

能力発現！その名も…（後書き）

感想待ってます！

主人公設定

名前…龍崎真夜
りゅうさきしんや

身長…165cm

体重…54Kg

眼の色…黒

髪の色…黒

髪型…魔法先生ネギま！の犬上小太郎と同じ感じ。

顔…上の下（女顔）

好きなもの…昼寝、静かな場所、甘いもの、美少女

嫌いなもの…昼寝の邪魔をする人、たけのこ

性格…普段はちゃらんぼらんな奴だが戦いなどになると真面目になる。

またシンヤをマヤと呼ぶとキレる。

能力…LEVEL3の『アイマーウェポン瞬間武装』

カードから武器を取り出す様子からそのように名付けられた。

また武器を取り出した後身体能力があがることからLEVEL3認定されている。

カードとは魔法先生ネギま！の仮契約カードと同じ機能が備わっており、来れ（アデアット）で武器を取り出し、去れ（アベアット）で武器をカードに戻すことが出来る。

またカードで武器を出すとき頭で念じるとその武器が出るが片手で扱える程度の武器しか出ない。

ほとんどはゼロの使い魔のデルFRINGER（剣）が出る。

デルFRINGERを出した場合のみ魔法先生ネギま！の神鳴流を使えるようになる。

こんな感じです！

質問があったらぜひ聞いてください！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5857n/>

とある科学の究極武装（アテルマウェポン）

2010年10月11日04時50分発行